

育ちの根っこ —障害乳幼児の地域療育—

藤林 清仁

障害や発達に遅れの見られる乳幼児とその家族を支える仕組みとして、地域療育システムと呼ばれるものがある。地域療育システムは保健機関、療育機関、保育機関からなり、それぞれが役割をもち、連携している。この中で核になっているのは療育機関だ。なぜなら、保健機関と保育機関の両方と共同して行う取り組みがあるからである。それでは、それぞれの機関で行っていることを紹介する。

保健機関が行っていることは乳幼児健康診査と親子教室の運営がある。乳幼児健康診査は、母子保健法に定められており、1歳未満に行う乳児期健診、18か月児健診、36か月児健診と3回行う。市町村に実施義務がある。障害がある、ないしは発達に弱さがある子どもを把握することは、親子への支援と結びつかねばならない。支援と結びつかない発見は「絶望へのパスポート」にもなりかね

ないからである。どんな子どもにも素敵な可能性がある。そのことを親に発見してもらうために、そして必要な子どもには、専門の療育機関を活用してもらうために、保健所や保健センターでは「親子教室」を実施している。必要な親子をしっかり把握し、次の専門的機関に紹介する責任は保健機関にある。親子教室のスタッフには、次に紹介すべき療育機関の職員が参加し、親や子どもと関係をつくる努力をしている。

療育機関では、発達支援、家族支援、地域支援と多岐にわたる支援を行っている。発達支援や家族支援という直接的な支援だけでなく、地域の保育所や認定こども園などを支える地域支援も行っている。保育機関では集団を活かし、仲間との関わりを通して子どもの育ちを支えている。

(本学 社会福祉学部社会福祉学科 専任講師)

2016年度より「いのちの教育」センターの主幹を務められた浅野玄誠教授が、去る11月17日、癌のため急逝されました。私の前任者として同朋大学の学長を務められ、また、当センター主幹として、本年度最初の講義に私を招いて下さいました。まさに「朝には紅顔あって夕には白骨となる身なり」との蓮如上人のお言葉通りの末期でありました。御往生の後には、「俱会一処」の言葉通り、いつの日かお浄土にての再会を願うばかりであります。(学長 太田 清史)

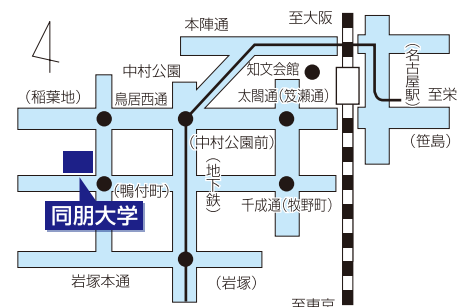
所員

- センター主幹：浅野 玄誠 (文学部人文学科 教授)
- 所員：田代 俊孝 (文学研究科 教授)
- 所員：木野美恵子 (社会福祉学部 教授)
- 所員：森村森鳳(張 偉) (文学部人文学科 准教授)
- 所員：石牧 良浩 (社会福祉学部 社会福祉学科 准教授)

お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス/栄又は笹島より②系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄/中村公園より③系統稲西車庫行、鴨付町下車



- 親鸞聖人の人間観 —「同朋和敬」と「樹心弘誓仏地」— … 1
- 〈毒婦〉という教育 …… 2
- インクルーシブ・ダイビング …… 3
- 育ちの根っこ—障害乳幼児の地域療育— … 4

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

2016年度も、前年度にひきつづき、「いのちの教育」をテーマに連続講座を開催いたしました。第1回は太田清史が「親鸞聖人の人間観」、第2回はゲストスピーカーとして元・大谷教学研究の所の高柳正裕氏をお招きして「生物学的いのちと本当のいのち」、第3回は眞有澄香「〈毒婦〉という教育」、第4回は下山久之「インクルーシブ・ダイビング —障がいのある人とともにダイビング—」、最終回は藤林清仁「育ちの根っこ—障害乳幼児の地域療育—」といった内容で開催いたしました。特に、最終回は、テーマに沿って、参加者の意見を逐次交えながら、ディスカッション形式での進捗を試みました。今号では、以上、全5回の講座のうち、本学教員が担当した4つの講座の要旨を紹介いたします。

2017.3.31 No.45

親鸞聖人の人間観 —「同朋和敬」と「樹心弘誓仏地」—

太田 清史

本年度より「同朋和敬」を建学の精神とする本学学長に就任致しましたが、前任校は「樹心」を建学の理念とする東本願寺直営の真宗大谷学園でした。何れの建学の精神も、共に親鸞聖人の御著書から頂いた言葉であります。

本学は校名にも「同朋」を掲げ、それを「共なるいのち」という表現で大学のスローガンとして参りました。すなわちこの世に生きとし生けるものは、すべての命の故郷としての阿弥陀如来の末裔であります。無量無数の命の働きかけをいただき、今ここに同じ命を生きる「世々生々の父母兄弟」としてあるのが私たちなのです。

一方「樹心」という言葉は、親鸞聖人の主著『教行信証』の後序の末尾に記された言葉です。そこで親鸞聖人は本願念仏に生かされている喜びを「樹心弘誓仏地 流念難思法海(心を広大な仏の誓願の大地に樹立し、念を思議しがたい法の海に流す)」と表現しておられます。前任校では「樹心」の語を英語で“To Be Human(人となる)”と表現し、「真の仏弟子」としての人間教育を実践して参りました。

「樹心」を建学の精神に掲げられた初代校長の清澤満之師はまた、真宗大学初代学長として「真宗大学開校の辞」において、次のことばを残しておられます。

「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、ことに仏教の中において浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々において最大事件なる自己の信念の確立の上に、その信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物の養成をするのが、本学の特質であります。」

同朋学園もまた「浄土真宗の学場」であり、ことに本学では「『真宗』こそが仏教の極致であり、『仏教=真宗』という位置づけがなされてきた」ことを、着任後学ばせて頂きました。

つまり親鸞聖人が自らも含めて人と生れたその意義を「共なるいのちを生きる人となる!」とみることで、時空を超えた真の仏弟子がここに誕生するのです。

(本学 学長)

〈毒婦〉という教育

眞有 澄香

国民皆学を目指した「学制」によって、明治期に制度化された学校教育、ことに当時の中等教育機関で使用されていた「読本（国語科講読用教科書）」を確認することは、近代日本における男女別学による教育の実態を知る上でも重要である。それらの「読本」からは、性差による教育理念—旧制中学校では質実剛健という兵士の養成、高等女学校では情操教育による良妻賢母養成—が明らかに見て取れるのである。

しかしながら、〈教育〉は、学校教育制度の内だけではない。制度外の庶民による〈教育〉に目を向けてみると、明治初期に消えたとされる〈毒婦〉たちが、実は明治中期から明治後期にかけて、「懺悔芝居」と銘打った芝居によって一世を風靡していた。

それらを、東京・横浜を中心とした芝居番付や役者絵などから調査していくと、これまで混同されてきた二人の「お政」が、実は、一人は窃盗犯として刑期を終えた嶋津お政であり、もう一人は前

科10犯の掬摸であった蝮のお政であることは明らかである。

さらに、「箱屋殺し」や「明治一代女」など、歌舞伎や新派劇で知られた花井お梅の出所後の動向も見逃せない。

神奈川県立図書館に所蔵されている肖像写真には、「貧児教育学校創立賛助員」と明記された、墨染めの衣に身を包んだ尼僧姿の嶋津お政が映し出されている。このこと一つとっても、いかに〈毒婦〉が「懺悔芝居」によって〈教育〉の重要性を訴えていったかが窺えよう。つまり、「懺悔芝居」は巷間における女子教育ともいうべき役割を果たしていたのである。

これまで看過されてきた〈毒婦〉の存在は、日本近代文学史のみならず、日本女子教育史の観点からも再検討しなければならないだろう。学校ばかりに依存しない〈教育〉とは何か、「懺悔」の意義についても、今一度再考すべき時期がきているのではなかろうか。

(本学 文学部人文学科 教授)

インクルーシブ・ダイビング

～障がいのある人と共に行うダイビングの実践～

下山 久之

頸椎・脊髄損傷者の9割は、比較的若い男性であることが知られている。その障がいを負うきっかけとなったのはバイクや車の事故、スポーツによる事故、あるいは仕事中の転落等による事故などであり、障がいを負う前は活動的な生活を送っていた方が多いという。しかし一度、障がいを負うと行動範囲は狭くなり、社会的交流も閉ざされがちになりやすい。そのような方たちと共に海中世界を散歩し、重力から解放され、自由な一時を味わってもらうためにゼミで毎年、夏にインクルーシブ・ダイビングを企画し、実践している。

スキューバ・ダイビングは、アメリカから広がってきたスポーツであり、その前提に「自立」と「自己責任」の原則がある。水中で起こり得る危険性を承知し、それへの対処法を理解した上で行うスポーツである。またダイビングは、二人ないし三人で一組となり、バディ・システムを組み安全に水中散歩を楽しむ

む。この時、バディ同士で支え合いながらダイビングを行っていく。

水中で呼吸をするためにレギュレーターなどの道具を活用し、そしてバディ同士の信頼関係が成立し、初めて水中散歩を楽しむことが出来る。障がいのある人も無い人も、互いを信頼し、何かあった時には共に力を貸し合い対処していかなければならない。障がいの無い人が一方的に「俺のことを信じて!」と言ったところで、信頼関係が形成されるとは限らない。果たして「いのち」は誰のものであろうか。一方的に「いのちを守ってやる!」と言ったところで、その言葉は説得力を持ち得るだろうか。

障がいのある人と共に行うダイビングの活動を通し、学生たちが「共に生きる」ということを体験し、そして頸椎・脊髄損傷者のみなさんが、もう一度、ご自身の世界を広げ、可能性を広げて行くきっかけになることを願い、活動を継続している。

(本学 社会福祉学部 教授)